

節目の年に

筑波大学理療科教員養成施設長
和田 恒彦

筑波大学理療科教員養成施設は、創立120周年を迎えました。

本施設の歴史の中で、1947年のGHQ旋風は過去最大の危機でした。

GHQ旋風では、視覚障害者の治療、野蛮な治療法、消毒の概念がない、教育制度の未整備、治療効果の科学的根拠が証明されていないという事が、問題視されたといわれています。これに対して関東、関西の業界関係者および盲学校関係者と視覚障害の業者らそれぞれ異なる立場で一致団結しながら存続運動を展開し（奥津：2016）、あん摩マツサージ指圧師、はり師、きゆう師等に関する法律制定につながりました。

本施設の設置目的は、「特別支援学校の理療の教科を担当する教員等を養成するとともに、理療に関する研究を推進する」とされているのはGHQ旋風の経験によるものと考えられます。

本施設は創立以来視覚障害鍼灸師を育成する教員を養成していますが、鍼灸治療効果の科学的根拠を得るために研究を遂行し、1961年に芹澤勝助初代施設長が理療師としてはじめて医学博士を取得され、以降理療関係の歴代施設長は博士号を取得しています。

現在理療科の生徒数は減少していますが、生徒の背景は多様になり、理療科教員の負担が増えています。私は、ベテラン理療科教員が多数引退していく今、これまで培ってきた理療教育が消滅してしまうことが、GHQ旋風以来最大の危機と感じています。

近年本施設では、卒業研究を学術論文として投稿することを推進しており、英語論文として掲載されるものも出てきています。また施設生、臨床専攻生、理療研修生が大学院博士課程に進学し、優秀学生として表彰される者が出るなど、理療の科学的根拠の証明に貢献してくれています。

しかし理療および理療教育の研究論文数は、実践されている臨床、教育に比べて十分とは言えません。「筑波大学理療科教員養成施設紀要」は「医学中央雑誌」に掲載され、また「つくばリポジトリ」を通じて論文がインターネット上に公開されます。理療科の先生方にはこれまで実践されてきた貴重な臨床および教育経験を世の中に伝えると共に、後進のために残していただくために研究論文をはじめとして、様々な文章を本誌に執筆していただきたいと願っています。

令和5年3月吉日